

私の回顧録

小島二郎

当時きくは、東京葛飾にある伊藤さんと言う家で働いていた。奥さんが板本村出身と聞いた。三郎の父は大阪には居ない

で金遣だったよう。天王寺の岡本さんえ落着き、荷物を片づけて東京のきくに会いに行った。そして、板本の実家で親戚の

人を招いて簡素な結婚式を挙げたのであった。が、きくの母親すみさんは、この時すでに他界し居なかった。三郎二十四歳、きく二十六歳の時である。当時岡本さんは、企業整備令で統合されることになって、自由に商いのできなくなっていた。かくして天下晴れての夫婦となり、当時、三郎の兄、太郎が満洲は奉天省清原で、二、三十人を使って土建業を営み成功しているとのことで、満期除隊したらこちらへ来てほしい、と慰問袋を送ってきたりし、再三誘われていたので、内地に居れば何れは又召集があるはず、とそんなことから再び大陸へ渡ることにした。下関から関釜連絡船に乗って釜山へ。そこで二泊し、南滿洲鉄道で朝鮮半島を縦断、滿洲国に

入り奉天駅へ。何時間かかったかは忘れたが、長い旅だったことは確か。さすがに寒さが身に沁みてくる。きくには初めての異国、黒い綿入れ服で膨れあがる大きい満人を気味わるがっついていたが、すぐに馴れたみたい。奉天からは、更に鈍行に乗換えて約四時間。赤い夕陽の滿洲も日はすっかり落ちて辺りは暗く、電燈

十年ぶりの再会で、兄嫁の美枝さんと初対面。きくは勿論初めてだった。処で、人を二、三十人使って成功しているとの話だったが、見ると、聞くのとは大違いで、夜になると満人の頭らしいのが賃金を取りにくる。やっさもっさの末、なんぼか払ってわれ、と言った調子。請求がいくらで、いくら残っているとの帳

ある。そしてその旨を伝えた。このとききくは、お腹に長男を宿していた。明日



昭和18年長男出産時の母子



昭和19年頃青島時代の三郎在住

天下晴れての夫婦に

滿洲から 薬品の青島へ就職

がボンヤリ点る人影まはらな清原駅。大地はすでに凍てついている。その駅前から、鈴の音高く響かせながら走る馬車に乗って兄の家に着いた。三郎には、兄太郎とは

面もなさそうな、どんぶり勘定。その場その時と云ったあんばい。日本が治めているからよいようなものの、と三郎は、これは長居はできない。性

からどうして生活している。と初めて経験する失業のピンチ、しかも遠い滿洲の地での心細さ。取敢えずきくは、出産のため板本の実家へ帰ることにした。三郎は、丸善

よくしたもので、丁度、日本へ帰る婦人と道連れになれたのであった。そして、三郎も後を追うようにして日本へ。こんなことなら一緒に帰れたものを、と思ったりもし、道修町の丸善薬品で石川さんにお会いした。かくして同社が新設した青島

出張所へ就職することになったのである。が、しみみと、捨てる神あれば拾う神あるを実感し、三郎は嬉しかった。後日談になるが、これが運命の分れ路にもなったのである。

終戦時、兄太郎は、満人に追われ機順まで逃げたがそこで力尽きたとのこと。清原での成功者と思なされた日本人は、駅前広場でみんな銃殺されたのだった。

(小島塗料取締役会長)

(つづく)